

1 生活科における教育課程編成上の課題と指導上の留意点

(1) 目標・内容の明確化・構造化

① 生活科の目標〈図 1〉

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

- 生活科の目標は、「具体的な活動や体験を通して、自立への基礎を養う」ことである。
- 活動や体験ありきにならないように、身に付けさせる力を明確にしておくことが大切である。

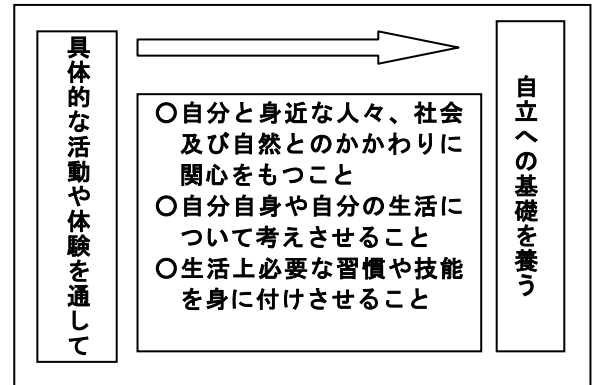


図 1 教科目標の構成

② 学年の目標〈図 2〉

- 2 学年共通、4 項目で構成されている。
 - (1) 自分と人や社会とのかかわり
 - (2) 自分と自然とのかかわり
 - (3) 自分自身とのかかわり
 - (4) 生活科特有の学び方（活動と表現）
- 目標 (1) (2) (3) の記述は、主な学習対象、思考や認識、能力や態度等を要素として示している。
- 目標 (3) は、今回の改訂において、働きかける対象への気付きだけでなく、自分自身の気付きへと質的に高まることさらに重視されたことから掲げられた。小学校低学年のメタ認知（自分へ向かう認識）ともいえる。
- 目標 (4) は、活動と表現を関連させた、生活科特有の学び方である。生活科は対象を学ぶのではない。そこが理科や社会と違う点である。対象と自分とのかかわりがあり、どんな関係があるのかを大事に学ぶのが生活科である。そこに、生活科の存在価値がある。

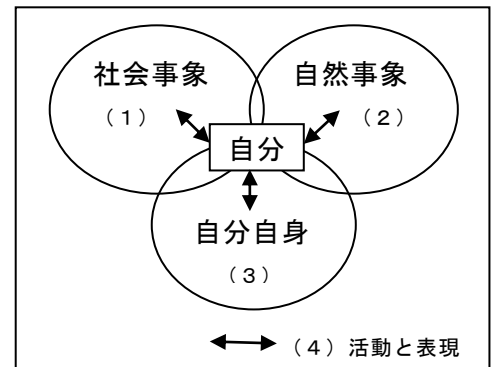


図 2 学年の目標の関係

③ 内容の構成要素と階層性

- 生活科の内容は9項目で構成されており、階層性がある。(解説 P22 参照)
- 各内容の記述には、「学習内容・学習活動等」「思考・認識等」「能力・態度等」の三つの要素が組み込まれ、一文で一体的に示されている。このことは、分かるだけでなく、できるようになってほしいということが意図されている。(解説 P23 参照)
- 内容 (8)「生活や出来事の交流」はコミュニケーション能力の育成と言語活動の充実を具現化するために新設された。メディアを使ったコミュニケーションも考えられる。情報の交流、収集、発信等の活動に十分な活動や内容や時間が用意されているかを見直す必要がある。
- 内容 (7)「動植物の飼育・栽培」の取り扱いについては、継続的な飼育、栽培を行うようにすることが強調されている。動物では、ザリガニ、ウサギ、モルモットなどを扱っている学校が多い。獣医師が丁寧にサポートしている学校もあり、獣医師や地域の専門家と連携して、よりよい体験を与える環境を整える必要がある。

2 学習活動に関する留意事項

(1) 気づきの質を高める〈図3〉

- 低学年の場合は、体験の中でいろいろ気付くが、それが自分の中で明確に意識化されていないことが多い（無自覚の状態）。表現活動を通して意識化させていくことにより、無自覚から自覚へ気づきの質が高まっていく。
- 一つ一つの事象（例：自然物における形の変化、色の変化など）に対する気づきが、お互いを関連付けた気づきへと変わって気づきの質が高まっていく。
- 対象と自分とのかかわりを深め、対象の変化に気付くと同時に、そこに映し出される自分自身の成長への気づきが生じる。この積み重ねが気づきの質を高めていくことにつながる。

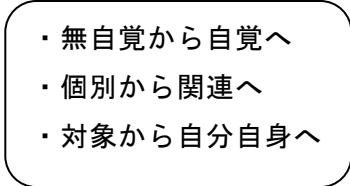


図3 気づきの質が高まるイメージ

(2) 気づきと内発的動機付け〈図4〉

- 没頭した体験活動を表現活動で振り返ることで、子どもは様々な気づきを生む。この時に充実感、達成感、自己有能感、一体感などの感覚が生まれ、意欲（好奇心、自立的欲求、向社会的欲求）につながる。そして自ら動こうとする内発的動機付けとなり、次の行動や行為に結びついていく。
- このサイクルが安定的に回ると、常に主体的に学習しようとする態度として表れ、多く回るほど気づきの質が高まっているといえる。

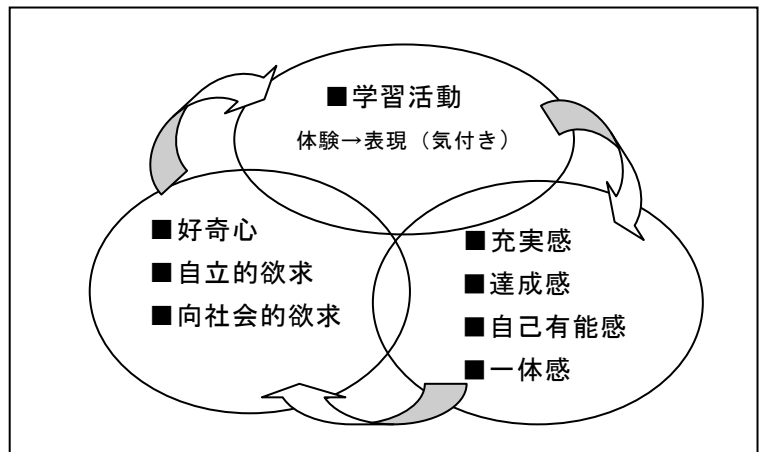


図4 気づきと内発的動機付け

(3) 学習活動の質的な高まり〈図5〉

- 体験活動で感じた歓喜や興奮を、少しだけ落ち着いて振り返り、言葉にして紡ぎ出すことで思考と表現が一体化し、確かな学びに高まっていく。
- 表現方法は、言葉に限らず、絵、動作、劇化など、様々でよい。子どもの発達段階にふさわしい多様な表現活動を取り入れるとよい。
- 体験活動で没頭し、表現活動で没頭する。相互作用しながら高まっていくのが良い実践である。
- 振り返る表現活動を行う際には、相手意識や目的意識のある必然性を伴った表現活動とすることが大事である。そして、表現活動が、次の体験活動へ主体的に結びついていく学習となることが望まれる。

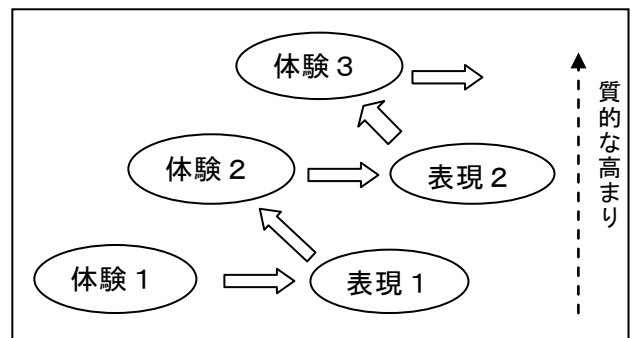


図5 体験活動と表現活動の相互作用

3 評価規準と評価場面

- 「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 生活】」（平成23年文科省）に各内容の評価規準の設定例が掲載されているので、活用するとよい。
- 教師は、目に見えないものを見取らないといけない。子どもの姿や作品を時系列で関連付けて見ると、事実が本質的に見えてくる。